

イタリア・大ギリシアの旅 土代 武

プーリア州へ

昨年12月に日本ではあまり名を知られていないイタリア・プーリア州を巡る旅に出た。イタリア半島はよく長靴に例えられるが、そのかかとにあたる部分である。この地方はローマの進出以前はギリシア移民による植民都市が点在し、古代ローマ人からはマグナ・グラエキア（大ギリシア）と呼ばれていた。アドリア海を隔ててギリシアと向かい合う所である。

ソウル経由のKAL便はだいぶ遅れてしまい、ローマ空港から鉄道でテルミニ駅に到着したのは夜10時を過ぎていた。駅横のホテル街で前に泊まったことのあるホテルをあたったが満室。近くのホテルをあたったところスイートルームしか空いていないとのこと、少々高めだったが時間も遅いし疲れ切っていたのでそこに宿泊することにする。

バロックの街レッツエ

翌朝テルミニからかかと部分の最も先にある町レッツエ行きの列車に乗り込む。約5時間半の旅だが途中オリーブ畑、ブドウ畑、麦畑、牧場など美しい農村風景が続く。半島を横断しやがて左手にアドリア海が見えてくる。プーリアでは4都市を巡ったがレッツエだけが少し内陸部にあり、周辺の物資の集積地となっている。旧市街にはローマ時代の円形競技場遺跡やバロック時代の華麗な教会などが密集している。曲がりくねった狭い道が多くすぐに道に迷ってしまう。南の地なので暖かいと期待していたのに、冬の風が吹き抜け寒々とした昼の街路に人影は少なかった。ところが夜になると人々は街に繰り出し、クリスマスの電飾の下をそぞろ歩き、レストランも人がいっぱいとなる。

古代ローマの玄関ブリンディシ

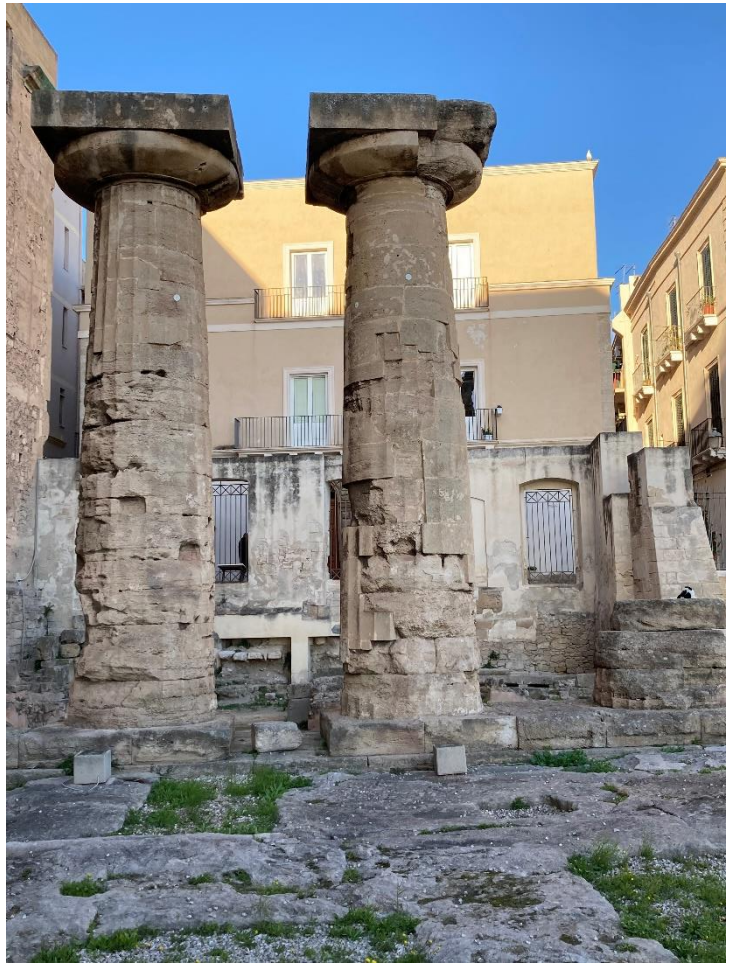
レッツエから日帰りでブリンディシを訪ねた。ここはアドリア海の重要な港で、ローマ時代はここからローマの凱旋門まで続くアッピア街道の起点となっており、それを示す石柱が港を見下ろす高台にそびえている。

ローマの支配以前からギリシアの植民都市だっただけに博物館にはギリシアの陶器などが所狭しと並べられている。旧市街にはレッツエの装飾過多のバロック建築とは対照的な素朴なローマネスク式の教会がある。港には大きな客船も停泊し今も海外との交流が盛んな様子うかがわれ、ギリシアへのフェリーも頻りに往復しているという。



あこがれのターラント

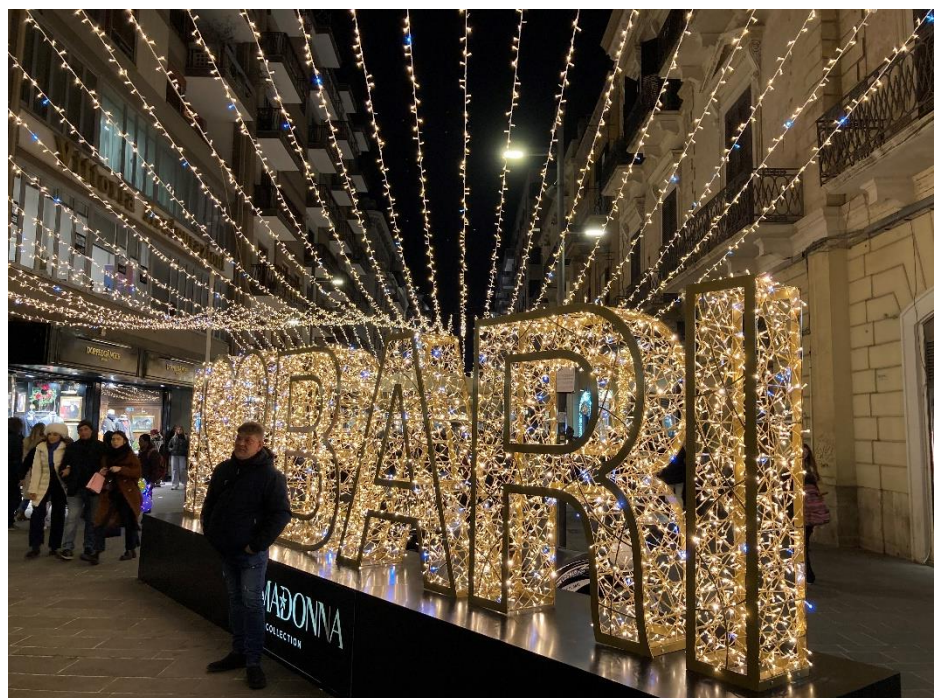
レッツエから比較的広い平原を抜け、長靴の土踏まずのように入り込むターラント湾に面する港町ターラントに到着。ここはギリシア・スパルタ移民がターラント湾と内海とを隔てる半島に形成した町であるが、近代になって軍艦の航行のための運河によって分離され、今は島となったところにぎっしりと旧市街が広がる。運河のたもとにはギリシア時代のポセイドン神殿跡の巨大な石柱が数本残されており当時をしのばせる。運河を渡り新市街にある考古学博物館は今回の旅行の一番の目的ただだけに、2万年前からのターラント地方の歴史が圧倒的な数と華麗な遺物にめまいを感じる程だ。



中心都市バーリ

ターラントから再びアドリア海沿岸に戻りバーリを訪れる。他の3都市と比べさすがプーリアの州都だけあってにぎやかだった。駅前から続く公園や大通りにはクリスマス用のイルミネーションが華やかだ。

駅から新市街を抜け海に突き出した旧市街に入ると街の様子は一変し、中世の世界に迷い込んでしまう。旧市街を守るように海辺にそびえたつノルマン城へ。この地方の支配者はくるくる変わるが北欧からやってきたノルマン王朝の時代のもので小規模だが堅固な作りだ。繁華街に近いバーリ大学では折からのイスラエルのガザ侵略に抗議する横断幕も見える。



古代ローマとギリシア

ローマに戻り、郊外の水道橋遺跡を訪れた。遺跡公園に着くとかつて清潔な水を運び古代ローマを支えた水道橋が途切れ途切れに延々と続く。

はるかかなたにも別の水道橋の姿も見える。これらは今は使われていないが、トレビの泉など今も泉の都ローマは健在である。

水道橋やコロッセオなど見ても古代ローマの土木、建築技術はすばらしい。しかし美術品にかけてはギリシアがずっとあこがれの対象だったようだ。紀元前後はグレコ・ローマン時代と呼ばれるが、ギリシア（グレコ）の彫刻のコピー作品がこの時代に盛んに作られ今も多く残っていることにもそれは表れている。



プーリアは海産物も豊富だし、ワインもおいしい。そしてオリーブなど農産物も豊か、そしてなにより濃厚なギリシアの香り。北イタリアや中イタリアもちろんもいいが、南イタリアは心豊かにゆったりとした旅ができるところだと思う。